

2020年度東北学院大学文学部教育学科公開連続講義
2021年2月8日(月)～2月14日(日)

教育の現在

—— 保幼小における支援可能性 ——

The Present of Education

—— Developmental Support in Elementary School and Preschool ——

講師：高橋 千枝（東北学院大学文学部教育学科 准教授）

キーワード：社会性発達, 社会的情報処理モデル, 保幼小連携

Key words : social development, SIP model, hoyousyourenkei

本報告は、2021年2月8～14日の日程でWebにて公開された、東北学院大学文学部教育学科の公開連続講義「教育の現在——保幼小における支援可能性——」の内容をまとめたものである。

1. 社会性発達について

公開講義ではまず社会性発達について述べた。社会性発達とは人が物との関係ではなく、人との関係を持つことができること（発達心理学辞典）であり、社会の規範や慣習などに適合した行動が取れるようになること（井上・久保, 1997）であるが、その土台には「人と共に在ると感じ、楽しいと思えること」（長崎, 2013）があると考えられる。そして社会性を発達させるには集団が必要であり、今日の保育所・幼稚園・認定こども園・学校が重要な役割を担う。子ども達は集団において、とりわけ仲間集団を形成することにより社会性を育てていくのである。たとえば、幼児期は仲間集団での経験を通して「楽しい」という感情とともに、友達を認める、友達から認められるといった仲間との肯定的関係を育てる重要な時期である。児童期は特定の他者と小集団を形成し、規律や役割分担、責任を学ぶ、また親密性も高まる時期である。青年期になると、親密性が一層高まり、同質なものを好み、異質なものを排除する傾向が出てくる時期であり、時には親よりも仲間を優先する場合もある。そして青年期後半になると異質なものも認めた上での仲間関係が形成される。このようにしてそれぞれの発達段階に沿った仲間関係を体験することにより、私達の社会性は発達するのである。

2. 社会的情報処理モデル（SIPモデル）

次に、私たちの行動決定に関する社会的情報処理モデル（SIPモデル）（Crick & Dodge,

1994; Lemerise & Arsenio, 2000) を紹介した。社会的情報処理モデル (SIP モデル) とは、自分に何かが起こった際に周囲の情報をもとに行動を決定するプロセスのモデルのことをいい、以下のようなプロセスがある。まず、(1)「何が起こったのか」手がかりを符号化する、次に (2)「なぜ起きたのか」手がかりを解釈し、(3)「どうするか」目標を明確化し、(4)「可能な行動には何かあるのか」反応を検索し、(5) 反応を決定し、そして (6) 実行する。その際、攻撃的行動の多い子どもは、敵対的なものを手がかりとする傾向があり、自分自身や他者の情動認知も困難であるという結果が得られている (松村, 2012)。また 5 歳児にもなれば、手がかりとして行動だけではなく情緒情報に着目することがすでに可能になるのだが (高橋ら, 2004)、攻撃的な子どもは就学前から複合的な情動の認知が困難であることもわかっている。SIP モデルから支援を考えると、ネガティブな経験が積み重なると、参照すべき行動が全てネガティブになることから、子どもの中にポジティブなデータベースを構築すること、また人間関係においてポジティブな経験をさせる支援が大切となることがわかる。

3. 移行期の支援

ここまでは社会性の発達的重要性について述べたが、幼稚園や保育所、認定こども園で子ども達はその社会性発達の基礎となる「人と関わりの楽しさ」を十分経験した上で小学校へ移行していく。しかし移行期、つまり就学前教育から小学校教育へと移行する時期は、新しい環境に適應することで精一杯になっている子ども達は、今までできたこともできなくなってしまうことがある。この移行期の支援が今課題となっている。新しい環境では緊張や不安でできることもできなくなるのは大人も同じであり、そして個別の支援が必要な子どもは新しい環境に慣れるのに通常の何倍も時間がかかる。移行期の「できない」は「発達」や「発達の困難さ」なのか「適應」によるものなのかを見極めた上での支援が大切になってくる。そのためにもスタートカリキュラムやアプローチカリキュラムを充実させる必要があり、個別の支援が必要な子どもにはなおさらのことである。

4. 最後に

社会性の発達においては、年齢があがるにつれて人と関わりながらルールや慣習に従うことを求められることが多くなっていく。ただ、その前に人と関わるのが「楽しい」と思えることが土台となる。保育所や幼稚園、認定こども園ではその楽しさを十分に育てて小学校へ送り出しているが、万が一不十分なまま就学を迎えていた場合は小学校以降でもまずはその土台づくりをしてほしいと思う。またそれを生活科や遊びを通して学べたらとも思う。移行期の支援は「段差をなくす」ことではない、むしろ発達の観点から段差はあって当然であり、段差があるからこそ発達であると考え。大切なのはその段差を乗り越えられる力を、保幼小の連携において子ども達につけることなのだとすることを最後に述べて公開講義を終了した。

(講義で紹介した引用文献は、本報告では紙面字数の都合により割愛した)